



ピンタ事件とスタンダップコメディアンと女性司会者と……多様化社会の文化が熱い

木村奈保子の音のまにまに | 第44号

今年のアメリカアカデミー賞の授賞式では、作品の内容や傾向を分析するよりも、ワイル・スミスのピンタ事件だけが話題をかぎらなかった。

かんじいのワイル・スミスが、オスカー主演男優賞を受賞した作品の内容など、だれも興味がなかったようだ（あの大根ナオミが教えるテニスのゼリーナ・ウィリアムズ選手師妹の物語で、ワイルは、その父親を演じた）。

何があっても暴力は禁止、というのは常識で、いうまでもないことだ。

謝罪することは、ものなしのこと。

ただ、その場所がセレモニーの場所であったことは大きく書いた。

第一回、団ったワイル本人が主演男優賞を得たための場所だったのだ。

すっかり大物俳優の間入りをして、ハリウッドセレブの人となったアフリカ系アメリカ人、ワイルを、そこまでの行動にさせてしまったのは何か、個人的な理由があったに違いない。

相手は白人ではなく、同郷のアフリカ系アメリカ人なのだ。

プレゼンターとして登場し、殴られたクリス・ロックは、いまや十分価値ある映画人の一人だが、スタンダップコメディアンとしてもまだ活動できる。

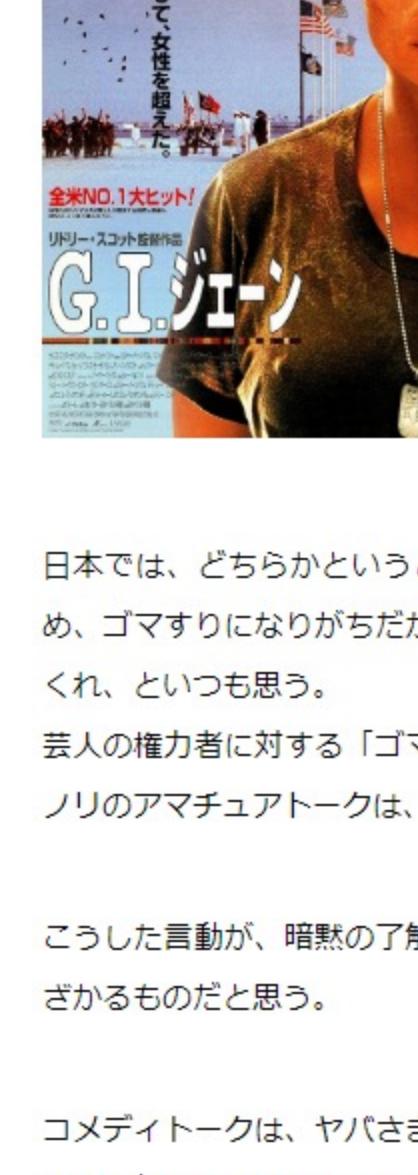
発想が豊富な面白口、超絶、チャーミングなキャラ。

黒人としての被虐ネタをかきながら語り、アホさを売りに、笑いをとる。

茶化し対象は白人中心で、虐げられた黒人の人生を明るく語る。

彼のステージネタをはじめて振り下げるとき、蝶の立つアンチ・エンダー思考もあるのが、トータルで喜んでみると、結構面白い。

白人に混じえた聴衆の女性客は、社会的な立場も超えて、みな笑い軽けている。



一方、毛髪をいじられた側のワイル・スミス夫人は、ユダヤ系ボルトガル人で、アフリカ系アメリカ人である女優、プロデューサーのジェイダ・ビンケット。

今回の受賞作「ドリームプラン」では製作総指揮の立場にある。

授賞式でこそ、エイジングな表しだが、そもそもバリバリ、キレキレのハーヴィー・マクエンガー出身。

マニッシュで、あら切符時のあるタフさには、圧倒される。

どう考えても、あの3人の中で一番タフなのは、ジェイダに決まってい

る。

ついでにいうと、クリス・ロックは、離婚により、妻から根こそぎ財産をもっていかれたばかり。ワイル・スミスは、自由恋愛主義の夫婦形態の中で、ちょうど妻のジェイダには、息子ほどの若い男と浮気されたばかり。

それも、彼女のほうが男性の相談に乗っていたという実情だ。

どうみても、ジェイダが、私を守ってほしいと訴えている立場には見えない。

クリスのジョークに、アハ! と爆発に笑ったワイルが、ジェイダのむっとした表情を見てびっくりしたことから、何か行動を起こすしかなかったため、とっさに出たのが、あのアホな行動ではなかつたのか?

「ごら、クリス、誰に言うてのや? それでワイル、何、笑うてるのや!」とジェイダは、二人の男たちをビビらせたのだからではないか。

と、悔謝するのは、私だけだろうか?

いずれにしても、白人と黒人の関係で起こった問題でなくて、良かった。

これだけが救いだと多くのアメリカ人たちが思つたであろう。

何より、ロシアンの一方的な偏陥により、世界を搖るが戦争に発展しているときに、無駄な事件を起こしたことに、況高す。

デカブリオが10億円、ミラ・ジョボビッチが40億円など、ハリウッドセレブが、ウクライナ支援を行っているときに、ワイル・スミスは、せいい事件でショックを盛り下げる。

夫婦とも、子どもたん数人としてサクセスしたファミリーで、アフリカ系アメリカ人のリーダーになるべき存在なのに、残念極まりない。

もはや、セレブ某けとすかしいようがない。

もし、私がジェイダなら?

もちろん、その場所はワイルのジョークでも、笑わずに、だまる。

あとこのバーティ会場などどこで、クリス・ロックに面と向かって、自分の口から、注意するだろう。

そうしないと、自分で気がすまないはずだ。

なので、自分が虐げられた元カソを、先に後悔をまかせてしませるのか?

ワイルが実際、失敗したように、期待通りのやり方が自分以外に、できるはずがなかったのだ。それとも、「おまえ、行け! ど平原はあつたのか?



むしろ、ジェイダは、このあと、ばかに行動をしてしまった夫の少しぬぐいをしていくほう、しんどいや棄になるだろう。

それで、「ジジエーン」のデミ・ムーアを超える黒人女性版映画を作製、主演すれば面白いのだが、確かに、クリスはいい発想を持っている!

る!

クリス・ロックも成功者ではあるが、ジェイダは、ワイル・スミスファミリーの真面目で、社会的にも経済的にも上位に立派だい、スタンダップコメディーは、格の人のやうじてなんの芸。

芸芸を持つお笑い芸人、芸人の喜劇界が先行しては、自由がなくなる。

日本では、どちらかといふと、トップを走る先輩芸人に権力があり、下にいる芸人たちは、売られたいため、ゴマソリになりがちだが、それが藝人を見ると、恥ずかしい。ゴマソリは、せめて、接客でやつててくれ、といつも思う。

芸人の権力者に対する「ゴマソリ」と、若い女性出演者の男性に対する「羞づ」あるいは、気楽な女子会ノリのアマチュアרקは、情けなく、見ていて辛い。最も不要な芸のひとつだ。

こうした言動が、喧嘩の了解となっているのは、政治家に対する「忖度」と通じるものがあり、芸から遠ざかるのだとと思う。

コメディトークは、ヤバさぎりぎり、のところを目指さないと、面白さが薄くなる。なにより、社会的な問題に取り組む激しいエネルギーを観客は期待しているのだ。そのため、芸人は自分の生き方に正直に向き合ひないといけない。

ピンタ事件の裏で、今年のアカデミー賞では、スタンダップコメディ恩のアマンダ・サイクスが女性3人のうちのひとりとして、司会役を務めた。

3人一緒に登場ではなく、授賞式の時間をひとりづけ受け、という自立したスタイルだ。

アマンダのスタンダップ・ショーは、本当に面白く、黒人被虐ネタもあるが、トランプ中心の政治家いじり、その上に自らレズビアンとしての私生活も強くネタにある。その達者なしゃべりには、舌を巻くばかり。

結果、男たちの厄介な事件により、影が薄くなった女性司会者たちは、50代後半のアマンダのほか、ホラーエロ女優出身のジニア・ホール（51歳、黒人）、クラウディア・コスメア・ペイジ、エミー・シマー（40歳、白人）など、若くない、美女ではない、東洋系の女性たちが起用されている。

ウクライナ系のエイミーがいるなら、セレンセキ大統領のスピーチ映像をばさんだほうが、よほど有意義にならなかったはずだ。

数年前に、性差別発言をした女性司会者がブーリングを浴びたせいで、アカデミー賞の司会はしばらくなし、という状況だったが、やつたこと、進行役を投げたのだ。

その女性キャスティングは、メジャーな大女優でもなく、男性コメディアンの隣に、そそ微笑む若い美女でもない。

レズ、ぱっちょり、黒人というマイノリティで括る女性たちが、メインホストになったのだ。

日本では、いまだに、そんな多様性はない。

女性活躍は、若い女性による自慢のメイクステージの隕落を作るが、男のためのメイク席は、ベテランの清水ミチコや上沼恵美子や近似にも、隠れないのである。

かつて、3時間とも授賞式の運びでMCを行ったワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、退屈さがない）ワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、退屈さがない）ワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、司会者としての価値を持つ）シャベリのスピード感や絶妙な『ヨーヨー』は、なくてはならないもの。

それが、男性ではなく、女性であっても、黒人であっても、同性愛者であっても、価値は下がらない。

「エレンの部屋」のエレンは、白人女性コメディエンヌだが、著名になってから、自らのレズビアンをカミングアウトした。

しばらく仕事をなくしたが、カミングアウトしない道はなかったという。

リアル社会でも、映画の主人公でも、次々とマイノリティが選ばれていく。

アカデミー賞貢献作「コーダ、あいのうた」は、ろう者の家族を支えるヤングケアラーの話だが、面白いポイントは、されどござらない。お腹震わぬ演出。

まるで、スタンダップコメディエンヌのように直球で、毒をもち、軽妙なテンポでコミュニケーションをしていく痛快さがある。

母親役は、あのろう者の女優、マリー・マトリ（妻は、静けさの中に）だし、父親役にろう者の俳優、トロイ・コッサーが助演男優賞に輝いた実力に、誰も意義はないだろう。

さまざまな角度から、愛が語られる時代。

アメリカ映画が違うテーマは、足を踏み外すことなく、健全である。

かつて、3時間とも授賞式の運びでMCを行ったワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、退屈さがない）ワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、司会者としての価値を持つ）シャベリのスピード感や絶妙な『ヨーヨー』は、なくてはならないもの。

それが、男性ではなく、女性であっても、黒人であっても、同性愛者であっても、価値は下がらない。

「エレンの部屋」のエレンは、白人女性コメディエンヌだが、著名になってから、自らのレズビアンをカミングアウトした。

しばらく仕事をなくしたが、カミングアウトしない道はなかったという。

リアル社会でも、映画の主人公でも、次々とマイノリティが選ばれていく。

アカデミー賞貢献作「コーダ、あいのうた」は、ろう者の家族を支えるヤングケアラーの話だが、面白いポイントは、されどござらない。お腹震わぬ演出。

まるで、スタンダップコメディエンヌのように直球で、毒をもち、軽妙なテンポでコミュニケーションをしていく痛快さがある。

母親役は、あのろう者の女優、マリー・マトリ（妻は、静けさの中に）だし、父親役にろう者の俳優、トロイ・コッサーが助演男優賞に輝いた実力に、誰も意義はないだろう。

さまざまな角度から、愛が語られる時代。

アメリカ映画が違うテーマは、足を踏み外すことなく、健全である。

かつて、3時間とも授賞式の運びでMCを行ったワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、退屈さがない）ワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、司会者としての価値を持つ）シャベリのスピード感や絶妙な『ヨーヨー』は、なくてはならないもの。

それが、男性ではなく、女性であっても、黒人であっても、同性愛者であっても、価値は下がらない。

「エレンの部屋」のエレンは、白人女性コメディエンヌだが、著名になってから、自らのレズビアンをカミングアウトした。

しばらく仕事をなくしたが、カミングアウトしない道はなかったという。

リアル社会でも、映画の主人公でも、次々とマイノリティが選ばれていく。

アカデミー賞貢献作「コーダ、あいのうた」は、ろう者の家族を支えるヤングケアラーの話だが、面白いポイントは、されどござらない。お腹震わぬ演出。

まるで、スタンダップコメディエンヌのように直球で、毒をもち、軽妙なテンポでコミュニケーションをしていく痛快さがある。

母親役は、あのろう者の女優、マリー・マトリ（妻は、静けさの中に）だし、父親役にろう者の俳優、トロイ・コッサーが助演男優賞に輝いた実力に、誰も意義はないだろう。

さまざまな角度から、愛が語られる時代。

アメリカ映画が違うテーマは、足を踏み外すことなく、健全である。

かつて、3時間とも授賞式の運びでMCを行ったワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、退屈さがない）ワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、司会者としての価値を持つ）シャベリのスピード感や絶妙な『ヨーヨー』は、なくてはならないもの。

それが、男性ではなく、女性であっても、黒人であっても、同性愛者であっても、価値は下がらない。

「エレンの部屋」のエレンは、白人女性コメディエンヌだが、著名になってから、自らのレズビアンをカミングアウトした。

しばらく仕事をなくしたが、カミングアウトしない道はなかったという。

リアル社会でも、映画の主人公でも、次々とマイノリティが選ばれていく。

アカデミー賞貢献作「コーダ、あいのうた」は、ろう者の家族を支えるヤングケアラーの話だが、面白いポイントは、されどござらない。お腹震わぬ演出。

まるで、スタンダップコメディエンヌのように直球で、毒をもち、軽妙なテンポでコミュニケーションをしていく痛快さがある。

母親役は、あのろう者の女優、マリー・マトリ（妻は、静けさの中に）だし、父親役にろう者の俳優、トロイ・コッサーが助演男優賞に輝いた実力に、誰も意義はないだろう。

さまざまな角度から、愛が語られる時代。

アメリカ映画が違うテーマは、足を踏み外すことなく、健全である。

かつて、3時間とも授賞式の運びでMCを行ったワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、退屈さがない）ワieber・ゴールド（バーカエレン・デュエレスもコメディエンヌだが、司会者としての価値を持つ）シャベリのスピード感や絶妙な『ヨーヨー』は、なくてはならないもの。

それが、男性ではなく、女性であっても、黒人であっても、同性愛者であっても、価値は下がらない。

「エレンの部屋」のエレンは、白人女性コメディエンヌだが、著名になってから、自らのレズビアンをカミングアウトした。

しばらく仕事をなくしたが、カミングアウトしない道はなかったという。

リアル社会でも、映画の主人公でも、次々とマイノリティが選ばれていく。

アカデミー賞貢献作「コーダ、あいのうた」は、ろう者の家族を支えるヤングケアラーの話だが、面白いポイントは、されどござらない。お腹震わぬ演出。